東京大学
文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 59, Sep. 2017

✻ 数字で見る ✻
東京大学文書館

3 年
国立公文書館等指定から

2
館体制
（本郷・柏）

108 人
102 人
53 人
閲覧者数
（上から 2015 年度、2016 年度、2017 年 7 月まで）

本郷
59 ㎡
柏
451 ㎡
収蔵庫面積

47 件
65 件
27 件
レファレンス数
（上から 2015 年度、2016 年度、2017 年 7 月まで）

7,000 点
10,000 点
8,700 点
所蔵資料数
（上から特定歴史公文書等、歴史資料等、学内刊行物 2017 年 1 月時点）

TOP1
文部省往復

TOP2
農学部前身組織関係資料

2015・2016 年度
閲覧利用回数の多い資料群
（特定歴史公文書等）

2015 年度
TOP1 加藤弘之関係資料
TOP2 井上哲次郎関係資料

2016 年度
TOP1 史料室アルバム
TOP2 内田祥三関係資料

閲覧利用回数の多い資料群
（歴史資料等）

2017 年度
閲覧者数、レファレンス数が
昨年度以上に増えています！
目録を随時更新中

Contents

2 東京大学文書館の新デジタル・アーカイブの試験公開
宮本　隆史

4 戦後教育改革期における東京大学と現職教育とのかかわり
小川智瑞恵

5 井上哲次郎「巽軒日記」翻刻から
村上こずえ

6 資料の公開について

7 業務日誌（抄）
（2017年2月～2017年7月）

8 文書館トピックス
東大に赤門がある理由を小学生に説明するという難題
森本　祥子

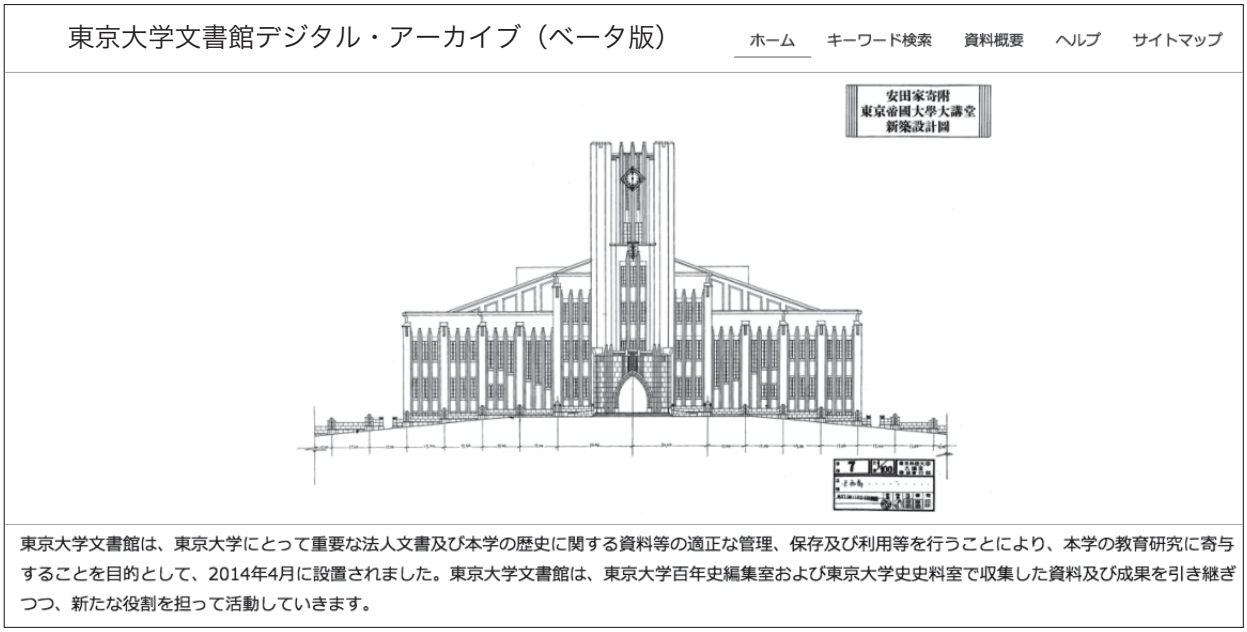
総合研究博物館主催特別展示「赤門−溶姫御殿から東京大学へ」（2017年3月18日～5月28日）に、当館資料も展示されました。
1885（明治18）年7月20日、本学事務所の西門（朱筆で「西」を「赤」と加筆）を東京大学の正門と定める旨、文部省へ送達した文書です。
（「文部省往復　明治十八年分二冊ノ内甲号」S0001/Mo082）

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

東京大学文書館の新デジタル・アーカイブの試験公開

東京大学文書館特任助教　宮本　隆史

東京大学文書館では、利用者が必要な資料を効率的に活用できるように、新しいデジタル・アーカイブの公開に向けて動いており、そのベータ版を試験公開した。本稿ではその紹介をおこないたい。



［図 1］東京大学文書館新デジタル・アーカイブ（ベータ版）　http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/da

従来のオンライン上の目録公開

東京大学文書館は、これまでオンライン目録検索システムを持っていなかった。ウェブサイトの資料目録のページでは、歴史資料として重要な法人文書（特定歴史公文書等）と、東京大学に関係する団体や個人から収集した歴史的・文化的に重要な資料（歴史資料等）の目録を見ることができるが、これらは静的な HTML 形式と PDF 形式の表として公開してきた。

この資料目録のページは、東京大学のウェブサイト内に置かれたものであった。そのため、これまでは利用者が資料を検索するための最適な方法を提供することは、十分には実現できていなかった。目録の中にどのような資料が含まれているかを検索するためには、PDF 形式の目録ファイルの中身を検索するほかなかったのである。さらに、複数の資料の目録を横断して検索することは、技術に長けている利用者でなければ困難であった。たしかに、東京大学のウェブサイトには検索機能が実装されており、PDF 形式の目録の中身も含めて資料検索をすることは可能ではある。しかしこの方法は、利用者にとって直観的にわかりやすいものではなく、さらに文書館以外の東京大学内の組織が公開しているコンテンツも検索結果に示されてしまうなど、文書館の資料の効率的な活用という目的のためには最適とは言えなかった。

また、公開中のデジタル画像の配信方法についても、改善が必要であった。既存の資料目録ページでは、『文部省往復』と呼ばれる公文書綴のデジタル画像を公開している。目録は HTML 形式の表として提供し、簿冊ごとの画像データは当初は PDF 形式で公開した。しかし、画像データについては、簿冊ごとにひとつの PDF データにまとめると、容量が大きくなり扱いづらいという利用者の声があった。これをうけ、ページごとの JPEG 画像を公開し、ウェブ・ブラウザ上で閲覧しやすいようにした。しかし、このような対症療法的な改善だけでは十分ではなく、より高機能な閲覧ツールの提供が望ましいことはあきらかであった。

さらに、学内の公文書の移管が 2016 年度から始まったため、目録を公開すべき資料群の数が大幅に増えたことに対応する必要があった。これまでは、資料群の数がそれほど多くなかったため、HTML 形式の表で公開することでかろうじて一覧性を保とうとしていた。しかし、公文書移管によって資料群の数が大量に増えたため、独自の目録検索システムを公開し運用することは、東京大学文書館デジタル・アーカイブ部門の課題であった。

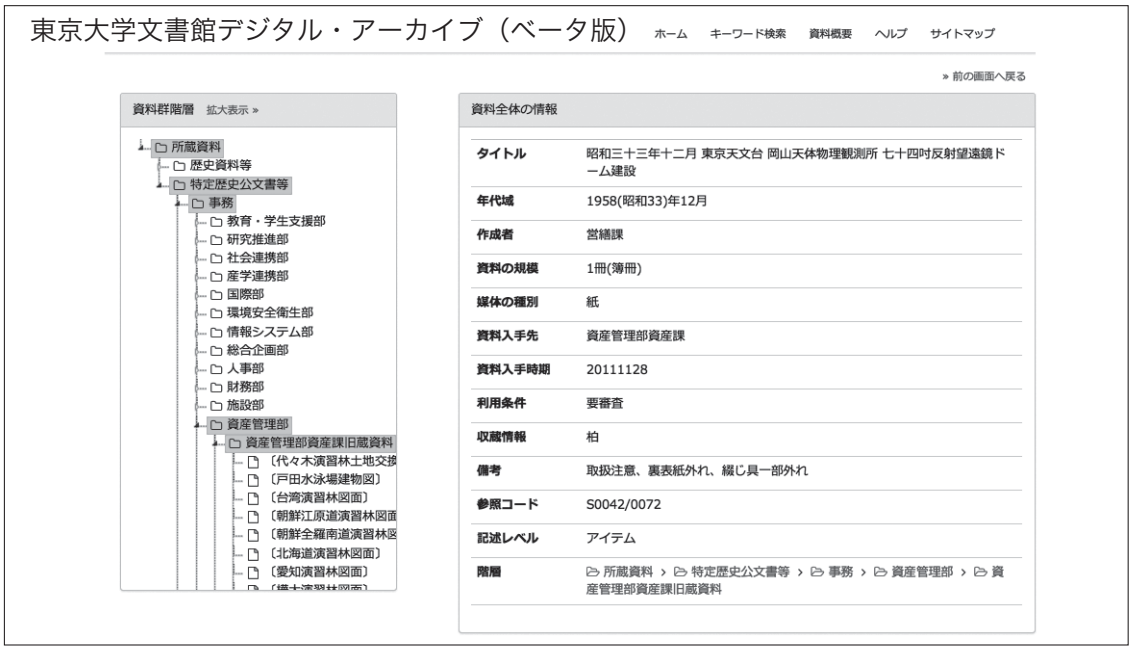
新デジタル・アーカイブの構築

文書館で新しいデジタル・アーカイブを構築するために利用できるのは、いわゆる LAMP（Linux, Apache, MySQL, PHP）環境と呼ばれる、ウェブ・アプリケーションを運用するために広く使われる環境である。この環境において、オープンソースのシステムを活用し、軽量なデジタル・アーカイブを構築することを目指した。目録情報の管理のためには、Omeka（http://omeka.org/）を利用する。これは、デジタル・コレクションのオンライン公開のために、ジョージ・メイスン大学のロイ・ローゼンツヴァイク歴史ニューメディア研究所が中心となって開発している、軽量のコンテント・マネジメント・システム（CMS）である。加えて、ユーザ・インターフェイスとして、機能拡張のためのプラグインがさかんに開発されている WordPress（https://wordpress.org/）を使うことにした。これらを組み合わせて、文書館の利用者のための基本的な資料検索ツールの提供を実現しようとしている。この新デジタル・アーカイブのシステムは、東京大学の文書館および大学院情報学環附属社会情報研究資料センターとの研究協力体制において、情報基盤センターの中村覚が設計・開発しているものである。

新デジタル・アーカイブには、キーワード検索と階層検索の二種類の検索機能［図 2］、そしてこれまでよりも高機能な画像閲覧機能を実装する。キーワード検索機能では簡易検索と詳細検索の

しくみを用意している。階層検索機能では、東京大学文書館が収蔵する資料全体を樹形図として表現し、その階層間を直観的に行き来できるようにした。検索結果画面では、アイテム以下の資料の一覧を示すとともに、それらの資料を含む最上位レベルの資料群の一覧も確認できるようにしている。また、その資料が文書館の資料全体の中でどこに位置づけられるかは、画面左側の樹形図上に示される［図 3］。新デジタル・アーカイブの利用マニュアルはウェブサイト上で公開している（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/da/manuals/）。

［図 2］新しい検索画面。キーワード検索（画面右側）と階層検索（画面左側）のツールを用意している。



［図 3］個別資料の詳細画面。

本公開とその後の展望

新デジタル・アーカイブのために開発したプログラムのコードは、上記のオープンソースのCMSどうしを接続するためのものと、利用者用のインターフェイスを中心としているが、これらはプラグイン化してメンテナンスを容易にすることが望ましい。それらのプラグインは、GNU 一般公衆利用許諾書（GPL）などオープンなライセンスにおいて公開すれば、東京大学文書館のみならずデジタル・アーカイブを運用したいと望む他組織や個人なども利用できる可能性が高まるだろう。2017 年度内にこのプラグイン化を行ない、新デジタル・アーカイブを本公開する予定である。

また、大学のように現在進行形で変化しつづけている組織の資料群の構造を記述するには、セマンティック・ウェブ関連の技術を活用することが効果的であるとかんがえている[1]。特に、目録情報をリンクト・データとして公開することができれば、活用の幅が大きく広がるはずである。現在の東京大学文書館が利用できるサーバ環境では、これをすぐに実現することはできないが、その方法の研究は、学内の情報基盤センターと大学院情報学環附属社会情報研究資料センターとの協力のもとに継続している。当面の解決策として、資料の目録データを、RDF/XML の静的データとして公開することで、より高度な活用ができるようにすることがかんがえられる。これは、新デジタル・アーカイブの本公開にともない実現する予定である。将来、環境が整ったときに、リンクト・データのかたちで目録情報を公開できるように準備を進めている。

---

1 この点についてはつぎを参照。宮本隆史 . 2016.「大学史関係資料のセマンティック・ウェブ技術による活用に向けて」.『東京大学文書館ニュース』57: 2-4. (http://www.u-tokyo.ac.jp/content/400045512.pdf)

（みやもと　たかし）

戦後教育改革期における東京大学と現職教育とのかかわり

東京大学文書館教務補佐員　小川　智瑞恵

はじめに

今年生誕150年を迎えた夏目漱石の『坊っちゃん』には、東京帝国大学文科大学から大学院に学び、1895年4月に愛媛県尋常中学校（後の松山中学校）へ英語教師として赴任し、一年後に熊本の第五高等学校に転任するまでの経験が生かされている。漱石のように、東京帝国大学ではとりわけ文科大学や理科大学の卒業生が中学校や高等教育機関の学校教職員となる割合が高かった[1]。戦前は基本的に小学校、中等学校の教員養成機関としてそれぞれ師範学校、高等師範学校が設けられていたが、中等学校には大学など高等教育機関を卒業した中等学校教員免許状の有資格者が多かった。

東京大学における長期派遣聴講生の受け入れ

戦後教育改革における教員養成

大学における教員養成が一般的になったのは戦後の教育改革以後のことである。戦前からの課題であった教育の機会均等の実現に向けて9年間の義務教育が定められ、6・3・3・4制の新しい学校制度が誕生した。新制大学が発足した1949年度、教育職員免許法が施行され、国公私立全大学及び学部で教員養成が可能となった。

現職教育への施策

戦後教育改革期における現職教育への政策のひとつに、都府県において銓衡された現職教員を高等教育機関に派遣し、個人の資質向上を図り各地域の教育活動の牽引者の任に堪える教師を養成することを目的とした長期派遣聴講生制度がある。開始時期などは府県によって異なり、早いところでは1946年頃から実施され、徐々に規定が整備されたとみられている[2]。

東京大学文書館所蔵資料にみる国民学校現職教員派遣

東京大学では、東京都の施策に応えて国民学校現職教員から成る聴講生を1946年に受け入れたことが東京大学文書館所蔵資料から読み取れる。本部庶務部で作成された『文部省（三）　昭和二十一年』（以下、①と表記）、『諸官庁　昭和二十二年』（②）、『諸官庁関係　昭和二十二年』（③）から派遣の経緯をたどってみたい。

東京都における研究派遣生の方針と東京大学の受け入れ

東京都では、第一回目の「研究派遣」が1946年度に開始され、国民学校の現職教員100名が東京大学、東京文理科大学、東京工業大学、東京音楽学校、東京美術学校、東京農林専門学校（東京高等農林学校）の各高等教育機関に派遣された（②）。

東京都教育局長から各区長などに宛てて国民学校職員研究派遣員の推薦依頼がなされたのが1946年6月のことである。東京都より聴講依頼をしたいという申越しをうけた文部省の学校局長日高第四郎は、関係大学および専門学校長にあらためて配慮を求め、東京都教育局長から直接連絡がある旨を伝えた（①）。

間もなく、東京都教育局長宇佐見毅から東京帝国大学総長宛てに、この度、東京都の国民学校職員中から優秀な者を選抜して、旺盛な研究心を充ちさせて資質の向上を計るため、貴大学の各専門学科を聴講させ、これによって帝都教育の推進力としたい、という派遣意図が記された9月16日付けの派遣生聴講依頼文が届いた。東京大学では本部事務局が窓口となって聴講希望先の各学部に派遣生受け入れの依頼がなされる。なお、聴講料は徴収しないという方針であった（②）。

派遣から4ヶ月を迎えた1947年1月、東京都教育局長から、所期の目的を全うするため今後の御指導について御高説を承りたい、という主旨から「東京都国民学校研究派遣生」に関する懇談会が小石川区にある茗渓会館で開催されることとなった（②）。

派遣期間の延長

1947年に学校教育法によって国民学校が廃止され新学制による小学校が発足、派遣開始から半年が経過した4月を迎えると、東京都からさらに半年延長の希望や次年度の派遣生聴講依頼が出される。それを反映して「東京都小学校教員研究派遣生」や「第一期東京都学術研究派遣」と表記されるようになった（②）。

研究証書発行願および報告発表会

派遣期間終了間近には、「研究証書」を下附してほしい、という申請が東京都教育局長から東京大学総長になされた（②）。

派遣期間終了後には、研究の一端を発表し、受け入れ機関の配慮や先生方の絶大なる御恩に報いるため、「小学校職員学術研究派遣報告発表会」が開催された。残念ながら東京大学では郵便遅延のためこの通知を発表会終了後に受信している（③）。

おわりに

東京大学が受け入れた東京都の研究派遣生は1946年度からはじまり、1946年10月から1947年9月の一ヶ年にわたることとなった。派遣期間やあらたな派遣生の継続もこの期間中に決まり、派遣生制度が整えられていったことがうかがえる。

教師教育の方針がさまざま審議され教育職員免許法が公布される以前に、東京大学では新制東京大学の誕生に向けて改革を進めている最中、国民学校・小学校からの研究派遣生の受講を認めるという形で初等教育に携わる現職教育に協力したことは注目されてよい。詳細については稿を改めて述べたい。

---

[1] 「卒業生の進路選択」『東京大学百年史』通史二、東京大学、1985年、175～197頁。

[2] 林三平「現職教育」、海後宗臣編『教員養成』東京大学出版会、1971年、322～326頁。

（おがわ　ちずえ）

井上哲次郎「巽軒日記」翻刻から

東京大学文書館事務補佐員　村上　こずえ

はじめに

明治期から昭和戦前期にかけて哲学者として活躍した井上哲次郎（安政2～昭和19年。以下、井上とする）に関する資料を当館にて所蔵しています（井上哲次郎関係資料：所蔵番号F0005）。現在、その中の日記、「巽軒日記」について翻刻を進めています。

小稿では、翻刻の進捗状況報告と「巽軒日記」の楽しみ方の一つを提案したいと思います。

翻刻の進捗状況

「巽軒日記」（「巽軒（ソンケン）」は井上の号）は明治26年7月27日から昭和19年12月5日までが記されたもので、文京ふるさと歴史館所蔵の3冊（大正11～12年上半期）を除いた84冊が当館に収められています。現在、明治26年7月27日から大正元年12月31日までの17冊、全体の20%の翻刻を終えました。明治33年から明治39年までの日記7冊の翻刻は『巽軒日記―自明治三三年至明治三九年―』（東京大学史史料室、2012年）、その他の10冊については、『東京大学文書館紀要』第31～35号（2013～2017年）で紹介しています。

日記の特色

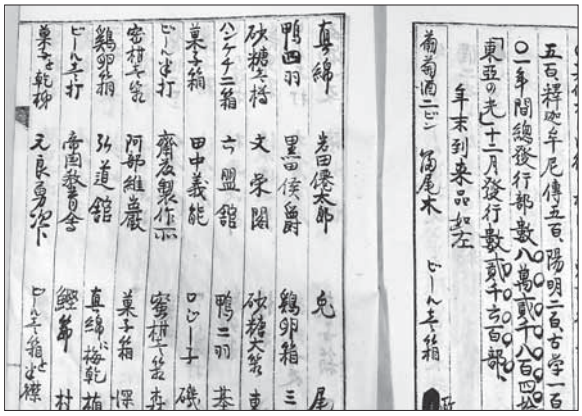
本誌第48号（2012年）において、井上の生涯と日記の全体像について報告されています（大間敏之「「巽軒日記」の一部翻刻・刊行に寄せて」）。日記は、井上自身や家族の動静、その日の面会者、手紙や読書の記録、社会の出来事等について記されています。日記の印象は事実が淡々と記されており、日誌的要素が強いように思います。

「巽軒日記」の楽しみ方

日々の出来事が淡々と綴られた日記ですが、その中に面白い記述を見つけることができます

(1) 年末到来品左ノ如シ（明治42年12月31日）

明治37年からはお中元やお歳暮、明治39年からはお年賀についても送り主と共に記されており、とても興味深いです。鶏卵やビール、砂糖、カステラ、特にお中元には浴衣や索麺（そうめん）、お年賀やお歳暮には反物、生鮮食品（鴨、鮭、林檎、蜜柑）などの記述が見られます。



明治42年お歳暮の記録（F0005/Ⅰ/12）

(2)「妻女及び小児三人帰来る、時に夜の十時なり」（明治39年8月19日）

前日の記述で「妻女及び小児三人鎌倉に赴く」とあります。これは翻刻した中では、家族が井上を残して初めて1泊の旅行に出掛けた時の記述です。井上を残して日帰りで出掛けた際には、帰宅時間を記してはいません。時間の記述は出張や旅行に行った際の移動時刻の他、子どもが生まれた時刻のみが記されています。井上を残して1泊旅行に出掛けたのはこの時のみであること、「時に夜の十時なり」という記述は他に見られないことから、井上が家族の帰りを待ちわびていた様子が想像できます。「やっと帰ってきたか」という井上の声が聞こえてきそうです。

(3)「象山詩鈔、正学指要及ひ大日本史論纂を乃木大将に貸附す」（大正元年5月15日）

大正元年9月13日に自刃した乃木希典についても記述があります。「乃木大将、使者を遣はして、三部の書を返す」（大正元年8月4日）とあり、この時すでに自刃することを覚悟していたのではと想像させられます。

終わりに

5年間、少しずつですが翻刻を続けています。感情が排された日記の翻刻は退屈に思われるかもしれませんが、だからこそ自由に想像できる余地を与えてくれます。また、その日の出来事が克明に記述されていることから、当館所蔵の井上哲次郎関係資料の中の書簡や写真について、日付の同定の助けになると考えています。例えば、陸軍中央幼年学校国漢文科西村豊からの書簡（F0005/Ⅲ/011）に記された日付は「三月九日」で年代の記述はありません。消印を見ると、「2.3.10」とあり、大正2年あるいは昭和2年のいずれかを特定できません。両年の日記を見るに昭和2年には記載がありませんが、大正2年3月10日に「西村豊より来状」と記されているので、大正2年ではないかと推測されます。

このように事実の跡付けが取れることから資料価値が高く、その観点からも研究者の利用も多い資料です。これからも益々活用していただけるように、色々な楽しみを見つけながら、続けて取り組んでいきたいと思っています。

（むらかみ　こずえ）

資料の公開について
（2017年2月1日～7月31日）

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト（目録）は、当館のホームページからご確認いただけます（http://www.u-tokyo.ac.jp/history/02_j.html）。

特定歴史公文書等

機構等

S0104　史料の保存に関する委員会
S0105　大学史史料室関係資料

事務

S0057　平成期科学研究費補助金関係資料
S0200　内部監査
S0201　オープンキャンパス
S0202　ホームカミングデイ企画・実施
S0203　キャンパス計画室会議
S0207　国際学生宿舎管理
S0208　入学料・授業料免除及び奨学金
S0223　学生委員会
S0236　空間情報科学研究センター　センター会議
S0237　空間情報科学研究センター　運営委員会
S0241　放射線安全委員会
S0242　情報システム委員会
S0265　本部共通施設運営委員会
S0266　財務・会計関係規則
S0289　外国人学生在籍状況調査
S0290　全国国立大学等留学生センター長・留学生課長等会議及び七大学会議
S0307　担当官吏交替に伴う事務引継
S0308　法規掛収集学内運動関係資料
S0315　キャリアサポート関係イベント開催
S0316　就職関係担当者連絡会議
S0338　産学官連携戦略展開事業
S0339　産学連携専門委員会

国際高等研究所

S0235　サスティナビリティ学連携研究機構　企画運営会議

全学センター

S0204　放射線取扱者講習会
S0205　アイソトープ総合センター　運営委員会
S0222　総合研究博物館運営委員会
S0260　情報メディア教育専門委員会
S0261　情報基盤センター諮問委員会
S0262　東京大学調査室

大学院・学部

S0224　教育学部・教育学研究科　教務委員会
S0225　教育学部・教育学研究科関係規則
S0226　教育学部・教育学研究科学部改革・運営関係
S0231　文学部国際交流協定関係
S0232　文学部規則制定改廃関係
S0233　教育学部附属中等教育学校　教官会議
S0234　教育学部附属中等教育学校時間割表
S0243　教育学部附属中等教育学校内規集
S0247　工学系研究科総合研究機構運営
S0248　工学系研究科・工学部　予算・決算
S0249　工学系研究科・工学部　国際交流委員会
S0250　工学系研究科・工学部　教育問題検討委員会
S0251　歴代工学部長・研究科長懇談会
S0252　工学部新2号館竣工記念式典
S0253　工学系研究科・工学部　広報室会議
S0254　工学系研究科・工学部　情報システム委員会
S0255　工学系研究科・工学部　安全管理
S0256　工学系研究科・工学部　学生支援
S0257　情報理工学系研究科　スタッフ会議
S0258　情報理工学系研究科　代議員会
S0259　薬学系研究科・薬学部　教授会・教授総会
S0267　総合文化研究科・教養学部　実験時における倫理審査
S0268　総合文化研究科教育会議
S0269　総合文化研究科・教養学部規則
S0270　教養学部前期課程クラス編成
S0271　総合文化研究科長・副研究科長選挙
S0272　総合文化研究科・教養学部　委員会
S0273　総合文化研究科・教養学部　国際交流・留学生委員会
S0274　総合文化研究科・教養学部　情報基盤委員会
S0275　駒場図書館運営委員会
S0276　総合文化研究科・教養学部予算
S0277　駒場地区衛生委員会
S0278　総合文化研究科・教養学部　運営諮問会議
S0279　経済学研究科修士課程入学試験問題集
S0280　経済学研究科・経済学部　教授会
S0281　医学系研究科・医学部　予算
S0282　医学系研究科・医学部　内規関係
S0283　医学部運営委員会
S0284　医学系研究科　各種委員会
S0285　医学部各種委員会
S0286　医学系研究科・医学部　外部関連団体関係
S0287　医学部将来計画委員会
S0288　医学系研究科・医学部　教授会
S0291　理学系研究科・理学部　教授会
S0292　理学系研究科・理学部　諮問委員会
S0293　理学系研究科・理学部　教育推進委員会
S0294　環境安全研究センター　教員会議
S0295　理学系研究科・理学部　環境安全研究センター運営委員会
S0297　理学系研究科・理学部　広報委員会
S0298　理学系研究科・理学部　企画委員会
S0299　理学系研究科・理学部　企画室会議
S0300　理学系研究科・理学部　学術運営委員会
S0301　国立大学理学部長会議
S0302　農学生命科学研究科・農学部　教授会
S0303　農学生命科学研究科・農学部　秘書
S0304　アジア生物資源環境研究センター　教員会議
S0305　生物生産工学研究センター　運営委員会
S0306　農学生命科学研究科・農学部　運営諮問会議
S0317　学際情報学府　教務委員会
S0318　情報学環・学際情報学府　運営懇談会
S0319　情報学環・学際情報学府　総務委員会
S0320　情報学環・学際情報学府・社会情報研究所客員研究員等期間一覧表
S0328　数理科学研究科　実務委員会
S0329　玉原国際セミナーハウス開所披露記念式典
S0330　駒場地区連絡会
S0331　数理科学研究科　運営諮問会議
S0332　農学生命科学研究科委員会

附置研究所

S0206　東洋文化研究所　教授会
S0209　生産技術研究所　教授総会
S0210　生産技術研究所　常務委員会
S0220　分子細胞生物学研究所　教授総会
S0221　分子細胞生物学研究所　職員組合関係
S0227　先端科学技術研究センター　経営戦略会議
S0228　先端科学技術研究センター　協議会
S0229　先端科学技術研究センター　参与会
S0230　先端科学技術研究センター学内委員
S0244　地震・火山科学共同利用・共同研究
S0245　地震研究所　将来計画委員会
S0246　地震研究所　企画運営会議

歴史資料等

学生資料

F0224　岡本鑒太郎関係資料

関係団体資料

F0121　白菊会関係資料

職員資料

F0221　旧職員寄贈資料1
F0225　旧職員寄贈資料2
F0222　時松昭関係資料
F0226　神前凞関係資料

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌（抄）
（2017 年 2 月～ 2017 年 7 月）

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

2 月 6 日	森本、妙木忍准教授（東北大学）へ白金学寮関係資料について聞き取り調査（本）
2 月 10 日	森本、全史料協平成 28 年度第 4 回大会研修委員会会議出席（群馬県立文書館）
2 月 15 日	森本、村上、OPAC に関する調査（総合図書館）
2 月 16 日	森本、加藤、宮本、工学・情報理工学図書館発足 10 周年記念イベントシリーズに参加（本）
2 月 17 日	羽田館長、森本（館長随行）、図書館長に地下書庫利用について申し入れ（附属図書館）
2 月 20 日	矢内原科研チーム（研究課題番号 25245058）、矢内原関係資料保護措置開始（柏）
2 月 21 日	森本、加藤、150 年史編纂準備 WG 参加（本）
2 月 23 日	加藤、宮本、総合研究博物館小石川分館見学
2 月 24 日	加藤、宮本、附属図書館研修プログラム「文書館柏分館の役割と実際を知ろう」のため見学受入
	柏地区研究センター支援室総務係職員関係資料の受入
2 月 27 日	東京大学文書館企画展示「東京大学文書館への招待」（4 月 6 日まで、柏図書館）
	小根山、企業史料協議会資料管理研修セミナー参加（中央大学駿河台記念館）
2 月 28 日	第 28 回館員打ち合わせ（柏）
3 月 2 日	岡本鑒太郎関係資料受入
3 月 6 日	森本、村上、障害者差別解消法への対応に関する研修受講（本）
	環境整備チーム、書架清掃（3 月 10 日まで、柏）
3 月 7 日	佐藤顧問、文学部日本史学研究室の鈴木淳教授より入試企画室資料を受領
3 月 8 日	小川、障害者差別解消法への対応に関する研修受講（本）
	村上、科学研究費助成事業実績報告等説明会出席（本）
3 月 9 日	森本、加藤、宮本、小根山、第 104 回全国大学史資料協議会東日本部会研究会出席・参加（柏）
	収蔵庫防虫のためエヤローチ散布（本）
3 月 13 日	森本、湯島小学校（教員 1 名、小学生 3 名）より情報モラル学習のため、赤門と安田講堂についてインタビュー対応（本）
	総合研究博物館特別展示「赤門―溶姫御殿から東京大学へ」のための資料貸出（本）
3 月 16 日	医学部精神医学教室関係資料の受入（本）
3 月 22 日	福井県教育庁開催展示のため資料貸出（本）
3 月 28 日	羽田館長、吉見副館長、森本打ち合わせ（本）
3 月 29 日	第 29 回館員打ち合わせ（本）
3 月 30 日	森本、加藤、宮本、広報課と東京大学 140 周年記念誌に関する打ち合わせ（本）
3 月 31 日	加藤諭特任助教退職
	『東京大学史紀要』第 35 号、『東京大学文書館ニュース』58 号刊行
4 月 5 日	紺野副理事、総合企画部部長、総務課副課長、視察のため来館（柏）
4 月 6 日	吉見副館長、森本、宮本、高嶋特任助教（情報学環）と、科学研究費プロジェクト（研究成果公開促進費・データベース）について打ち合わせ
4 月 12 日	嘉治真三関係資料の一部資料に保存処置（本）
4 月 14 日	紺野副理事、総合企画部部長、視察のため来館（本）
4 月 20 日	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
4 月 24 日	平成 29 年度第 1 回東京大学文書館運営委員会開催（本）
	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
4 月 25 日	第 30 回館員打ち合わせ（柏）
4 月 27 日	森本、大学院農学生命科学研究科土壌圏科学研究室にて資料調査（本）
5 月 1 日	森本、学術資産等アーカイブズ委員会代理出席（本）
	分子細胞生物学研究所関係資料受入（本）
5 月 8 日	大学院農学生命科学研究科土壌圏科学研究室関係資料受入（本）
5 月 9 日	環境整備チーム、書架清掃（5 月 11 日まで、柏）
5 月 11 日	宮本、高嶋特任助教（情報学環）と科学研究費（成果公開促進費･データベース）に関する打ち合わせ（本）
5 月 11 日	福井県教育庁より展示貸出し資料の返却（本）
5 月 12 日	森本、経済学部資料室にて打ち合わせ（本）
	宮本、平成 29 年度第 1 回柏キャンパス一般公開担当者会議出席（柏）
5 月 17 日	森本、小川、村上、医学部より追加移管文書受入（本）
5 月 19 日	佐藤顧問、森本、150 年史編纂準備 WG 打ち合わせに出席（本）
5 月 23 日	収蔵庫防虫のためエヤローチ散布（本）
5 月 25 日	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
5 月 29 日	森本、国立公文書館職務基準会議出席（国立公文書館）
	総合研究博物館より展示貸出資料の返却（本）
5 月 30 日	第 31 回館員打ち合わせ（本）
	附属病院および史料編纂所より移管文書の搬出（本）
5 月 31 日	森本、宮本、卒業生室とホームカミングデイについて打ち合わせ（本）
	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
5 月 31 日	空調 24 時間稼働開始（柏）
6 月 1 日	森本、村上、新図書館内覧会参加（本）
	南原繁関係資料の追加受入（本）
	環境整備チーム、除湿機排水作業開始（柏）
6 月 2 日	神前禋関係資料の受入
6 月 8 日～ 9 日	森本、宮本、平成 29 年度全国公文書館長会議出席
6 月 9 日	環境整備チーム、書架清掃（6 月 11 日まで）、消防設備点検（柏）
6 月 13 日	バリアフリー支援室（3 名）、職場環境の視察（柏）
	森洋久准教授、白石愛特任助教（総合研究博物館）、展示のための資料調査（本）
6 月 15 日	法学部図書館関係資料受入（本）
6 月 16 日	森本、150 年史編纂準備室 WG 陪席（本）
	宮本、高嶋特任助教（情報学環）と科学研究費（成果公開促進費･データベース）に関する打ち合わせ（本）
6 月 21 日	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
6 月 22 日	村上、ALAYA CMS 操作実習（本）
6 月 26 日	森本、旧制東京高等学校資料調査（附属中等教育学校）、空調 24 時間稼働開始（本）
6 月 27 日	第 32 回館員打ち合わせ（柏）
6 月 28 日	附属中等教育学校より旧制東京高等学校資料受入
6 月 29 日	読売新聞社、東大古写真調査のため来館（本）
6 月 30 日	収蔵庫防虫のためエヤローチ散布（本）
	宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
	宮本、高嶋特任助教（情報学環）と科学研究費（成果公開促進費･データベース）に関する打ち合わせ（本）
7 月 3 日	大村芳昭氏より刊行物受入
7 月 4 日	吉見副館長、森本、宮本、最首悟氏宅にて資料調査
	森洋久准教授、白石愛特任助教（総合研究博物館）、展示のための資料調査（本）
7 月 10 日	学習院大学大学院アーカイブズ学専攻学生 2 名、アーカイブズ実習準備のため来館（本）
7 月 11 日	環境整備チーム、書架清掃（7 月 12 日まで、柏）
7 月 12 日	最首悟氏より大学紛争関係資料受入、コンパット交換（柏）
7 月 20 日	森本、桑尾光太郎氏（学習院アーカイブズ）と 150 年史に向けての情報交換（本）
7 月 24 日	森本、宮本、中村助教（情報基盤センター）とデジタルアーカイブについて打ち合わせ（本）
7 月 25 日	第 33 回館員打ち合わせ（本）

文　書　館　ト　ピ　ッ　ク　ス

東大に赤門がある理由を小学生に説明するという難題

2017年3月13日、文京区立湯島小学校の3年生3名が、情報モラル学習の一環として東京大学について調べるために来館しました。テーマを決めて自分達で調査し、それをホームページで発信する手続きまで体験する、という課題だそうです。

当日は、森本が対応に当たりました。小学生を文書館に迎えることは珍しく、楽しみにしていたのですが、これはとても難しい仕事だということを思い知らされました。

例えば「なぜ赤い門があるのですか？」という問い。インタビュアーは小学生ということをふまえて、「いま東京大学があるところは、江戸時代には大名の前田家のお屋敷でした。その前田家に将軍様のお姫様がお嫁にきたときに、決まりによって建てた門が残っているのです」と、言葉使いを工夫しつつ答えてみました。が、彼らはきょとんとしています。考えてみれば、「江戸時代」も「大名」も「将軍」もまだ学校では習っていないため、特別に歴史好きでもない限りわからなくて当然なのです。

さらに、オリジナルの資料そのものに触れることは面白いに違いないという、アーキビストによくある思い入れから、安田講堂や赤門の古い写真を並べてみましたが、これもぴんとこない様子。インタビュアーさんたちはよく事前準備をしてあり、こちらの的外れな情報提供にもかかわらず、がんばって彼らなりに答えをまとめあげましたが、こちらはなんとも申し訳ない気分で見送ることとなったのでした。

この経験から、学校教育でのアーカイブズ利用のあり方を考えさせられました。今回のように歴史の前提知識が求められる話は小学生には難しく、少なくとも中学生以上が対象となるでしょう。オリジナル資料を前に時間の流れを感じるというような体験は、さまざまな知識が前提にあってこそ成り立つものです。

むしろ小学生には、歴史という固定観念をとりはらった視点から文書館を身近に感じてもらうようなアプローチが必要です。大学のアーカイブズとしては難易度の高い課題ですが、各地の文書館での取り組みや学校の先生方に教えていただくなどして、徐々にアイディアを練りたいと考えています。

今回訪問してくれた小学生たち、これに懲りずにまたいつか遊びにきてくれたらいいのですが！

（森本　祥子）

東京大学文書館ニュース　第59号　ISSN 0915-3284

発行日：2017年9月30日（年2回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

印刷所：松枝印刷株式会社